

浄土

monthly
JŌDO

2013

February

2/3
March



平家物語断章

討論上殿

第二段

忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願、特長寿院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一体の御仏をすへ奉る。

辺国を転々として、うだつのあがらぬ平家一統のなか、清盛の祖父正盛は讃岐守を拝命し、この家系にのみ陽が射した。続いて父忠盛は備前守を拝命。ついに昇殿する。

そして、蓮華王院（三十三間堂）に先立つこと三十二年。現存のものとはほぼ同じ規模の寺院を現在の左京区岡崎のあたりに独力で造進したのである。

東京・谷中

功德林寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



平成24年4月に落慶した無量山功德林寺の本堂と功德林寺第五世となる新谷仁海住職。本堂の正面中央が四間開く造りとなっているのが特徴で、本尊が遠く前庭からも参拜できる。





本尊、阿弥陀如来坐像。

空間をうまく利用した風情のある中庭。



すっきりした玄関も落ち着いた雰囲気を出している。

平成24年4月29日の落慶式。天王寺からのお練りは谷中霊園を抜けて功德林寺に。



遠州茶道宗家13世家元
小堀宗実師から献茶を受
けとる新谷住職のご母堂、
千賀子さま。



天王寺のお堂前で稚児さんと
お練りの準備をする新谷住職。



落慶式後の祝賀会での記念写真。
左はご内室の陽子夫人。右はこ
令嬢の碧乃さんで日舞を披露さ
れた。



功德林寺本堂の内陣。



本堂の屋根同様、チタンが使われている客殿。
街並みに溶け込む美しいフォルムだ。

浄土

2013/2・3月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京谷中 功德林寺	写真＝タカオカ邦彦	1
法然上人をめぐる人々を終えて	石丸晶子	6
	聞き手＝長谷川岱潤	
寺院紀行 東京谷中 功德林寺	真山 剛	14
スペシャル対談 市川團十郎×若林隆壽		22
会いたい人 追悼特別篇 勘三郎さんに感謝	関 容子	28
響流十方	林田康順	32
江戸を歩く	森 清鑑	36
連載小説 渡辺海旭	前田和男	42
Jフォーラム		47
誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	51
編集後記		52
表紙裏・平家物語断章		
背表紙裏・秦雲の美味探訪		



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

本誌連載

法然上人を
めぐる人々を終えて

石丸晶子先生に聞く

後編

聞き手（編集）長谷川岱潤

編集 法然上人は、源智上人の出生のことは聞いていたのでしょうか？ また、だとしたら慈円僧正にはお話ししたのでしょうか？

石丸 源智上人が法然上人のもとに預けられたのは十三歳のときです。で、付き添ってきた母親あたりが、法然上人にはお話ししたのではないのでしょうか。

編集 それで、二年間ぐらい、比叡山に。

石丸 そうですね。よく言われることですが、そのころは法然上人のところに人々が押しかけていたんです。貴族の日記を見ると、大繁盛していたと書かれています。

ですから、法然上人は万一のことを考えられて、比叡山の慈円僧正に預けられたと思います。慈円僧正は鎌倉とも良好な関係で、比叡山というのは、何といっても大権力、大集団ですから、そこに置いてほしいと依頼されたのではないのでしょうか。

でも、慈円僧正にどこまで打ち明けられたかどうかは、わかりません。私は小説では、慈円僧正にだけは事情を話されたというように書きました。何も知らせずにお願ひするのでは、慈円僧正のような方に失礼かと思つて、そのように書いたんですが、先生から今ご質問をいただきました。慈円僧正に特別言わなくてもよかったんじゃないか。ただ、「愛弟子を預かってほしい」と。ご自分も比叡山で修行されましたから、修行させてほしいとだけおっしゃったのかもしれない。そんな気もしてきました。

編集 そのあと、石丸先生は親鸞も取り上げられましたが、親鸞さんは浄土真宗という大きな教団の開祖ということなので、我々も細部にわたって触れるのを遠慮してしまうのですが、先生がずばずばといろいろなおっしゃって、とてもひやひやしながら、原稿を読ませてもらっていたのです（笑）。

石丸 親鸞聖人がなぜ妻帯したかということについては、平松令三先生など浄土真宗の宗学の方でも、性欲説をとっている方がいらっしやいます。

しかし他方、親鸞びいきではあるけれども、宗学とは関係のない先生に、私は教えていただいて、『教行信証』を何年間かずっと毎月読んできたんですが、その先生は親鸞が妻帯したのは、性欲のためではなくて、純粹に教義上のものだったとおっしゃっています。

つまり、俗世の人と僧侶との間には何の隔たりもない。全く一緒だということを、身をもって示すために、結婚されたんだと言うのです。だから信仰の上から結論として、結婚の道を選ばれたんだということです。

しかし、かえって宗学の先生で平松先生などは性欲説をとっておられます。

編集 逆みたいです。

石丸 宗学の方ではありませんが、赤松俊秀先生も性欲説です。親鸞はすごく大きな存在ですから、ある面で妻帯という、それまでタブーであったものを、正式にスタートを切られたわけですから、どうしても取り上げたいと思いました。どうして妻帯に至ったかということを書きたかったのです。

それで、私は、純粹に、理論上の悩みからとか、信仰上の悩みからではなくて、赤松先生や平松先生が書いておられるような立場で、書かせていただきました。

編集 読み物としては、とてもおもしろくて、読ませていただきました。

石丸 でも、親鸞聖人が法然上人を慕うことはすごく深く、お手紙の現代語訳をしたのですが、至るところで、「大師・法然上人」とか、「大師・法然上人がこう仰せであった」「これは、私が勝手に言っていることではなくて、大師・法然上人から直接伺ったことだ」

というようにして、おっしゃっています。

親鸞聖人のお手紙は、晩年に書かれたもので、若き日のものではなく、関東布教を終えて、京都に引きこもったあと、関東のお弟子たちに与えたお手紙なんです。

晩年に至ってもなお、若い日、本当に五、六年間です、法然上人とお会いしていたのは。それを忘れずに、「大師・法然上人はこう仰せであった」というお言葉に、何かとても感動しました。

編集 ものすごい影響力があったということですね。

石丸 法然上人がそれだけの人間性を持っておられたんですね。

これは、五木寛之さんがおっしゃった言葉ですが、「面受」という言葉があるそうです。ただうわさで聞くとか、書き物で読むとかではなくて、対面してその人の全人格に触れながら、お話を聞くということです。この「面受」の力というものが、法然上人はいか



に偉大であったかと思っています。

それが、法然上人のご人格の偉大さを示しているというように、五木先生が講演の中でおっしゃっていました。

わずか数年、「面受」をされただけなのに、五十年後、六十年後に至るまで、親鸞聖人は、「大師・法然上人」「大師・法然上人」とおっしゃっているんですね。本当にすごいなと思います。

編集 ですから、この章の表題は「師を慕う親鸞」とつけさせていただきました。

石丸 そうでしたね。私がどのように表題をつけるか悩んでいましたら、先生からその表題をいただき、本当にドンビシヤリだと思いました。

編集 では最後に、先生が連載の中では書けなかったけれども、法然上人について何か言



っておきたいことが御座いましたら、是非お聞かせください。

石丸 連載で書けなかったことではないのですけれども、書き進みながら見えてきたものとして、お話ししてみたいことがあります。

編集 何でしょうか。

石丸 法然上人が四国に流されるとき、淀川を下つていかれますね。

そのとき淀川の入り江のところ、神崎^{かんざき}の泊^{とまり}での事件については非お話ししてみたいことがあります。

編集 そのことは何の資料に出ているのでしょうか

石丸 元禄時代にその土地の伝承をもとに建てられた「遊女塚」が現在もあり、江戸時代の末の頃（十八世紀末）に刊行された『撰津名所図絵』というものに残っています。

法然上人からお話を聞き、立ち去られたあとで、その泊の遊女五人が、入水自殺をしています。遊女たちが五人、入水自殺す



るといのが、私はずっと、どうしてかなと、引っかかっていました。

でも、小説を書き進んでいくうちに、本当に小説を書くということは、繰り返しになりますが、エッセーとか評伝とは違って、見えてくるんですよ。

見えてきたものは、そのとき遊女が死んだ。

法然上人によって、そのみ教えによって、心がすごく清められて、それで、身売りするという職業に今後とも従事することを厭い、この法然上人のみ教えに接して心が美しい状態のときに、極楽往生しようといって、身投げしていったと思うのです。

法然上人が「お前たちは、卑しい、身売りする遊女だから、救われないぞ」とか、「死ね」とかおっしゃったのではないのです。

法然上人は「卑しい」とかおっしゃって切り捨てることはなさいませんでした。ただ、「一身を投げ打つだけの決心がつかくならば、そこから足を洗いなさい」と仰せられ、また、「いろいろな事情でその仕事を続けていかなければならないのであれば、ただひたすら念仏を称えてください。阿弥陀仏はあなたがたのような方のために、南無阿弥陀仏の教えを残してくださいました。」ということをおっしゃっています。

編集 そうですね。そこが法然上人のすごいところでしょうね。

石丸 すばらしいみ教えで、それを遊女たちが聞いて、すごく感動して、きれいになった心のままで、極楽往生したいといって、淀川に身を投げたと、私は書いているうちにそれが見えてきたんです。

法然上人はとにかく偉大な方で、親鸞聖人が最後の最後まで、「大師・法然上人」と慕い続けられたということがよくわかります。



繰り返しになりますが、「面受」ということを、五木寛之先生がしきりにおっしゃっていますが、私たちは、法然上人が書かれたものを読むしかないのですけれども、浄土宗が八百年間続いて、また未来に向かって発展していくことを思うと、法然上人という方が、どんなに偉大な方だったかということに心打たれます。

編集 今日ありがとうございます。

(了)

寺院紀行

東京・谷中

功德林寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



落慶式での僧侶の記念写真。増上寺法主の八木季生台下ならびに知恩院北川一有執事長にもお出ましいただけた。

「一昨年5月に行なう予定だった落慶式の案内まで、準備がすべて終わった時、あの大地震が東日本を襲いました。幸い建物も完成直後で大きな被害には遭いませんでした。が大変な状況となり、だいぶ悩んだ末に式を一年延期する決断をしました」

一年延期された功德林寺の新伽藍の落慶式は昨年4月29日、無事に成満した。新本堂の正面に聳えるまだ木目も鮮やかな角塔婆を見上げながら、功德林寺新谷仁海住職が感慨深げに話してくれた。

新谷住職が第五世となる功德林寺は、上野駅からふたつ目の日暮里駅の山手線内側に広がる谷中墓地内にある。谷中墓地は多くの著名人の墓があることで有名だが、近年は谷根千といつて、谷中、根津、千駄木という下町情緒あふれる東京の観光名所としても脚光を浴びている。中でも谷中は、テレビや映画のロケにしばしば登場する「夕焼だんだん」という谷中銀座商店街へ続く階段や、富士見坂など、人気スポットが多い。加えて谷中は東京で最も寺院が密集していて、休日ともなれば、有名人の墓や史跡めぐりの人々、谷根千を散歩する観光客、そしてお寺の参拝者で、それこそ道という道が人々でごったがえす。

こうした人気観光地となった理由は、谷中が関東大震災、第二次世界大戦ともに被災することなく、今日まで昔の街並みや面影を残してきたからである。そして、功德林寺も明治時代の創建とともに

谷中で有名な「夕焼だんだん」と呼ばれる商店街に続く階段。



JR山の手線、京浜東北線、京成本線、日暮里・舎人ライナーが走る日暮里駅。駅右手の丘に谷中霊園が広がっている。

建立された本堂を残していたのである。しかし、平成17年秋、新谷住職が本堂裏手となる初音通りに土塊を見つけた。何だろうと調べてみると、その土が本堂の棟から崩れ落ちた泥とわかり、本堂が老朽化していることに気づかされたのである。このまま放っておくわけにはいかない。新谷住職は立て直しに踏み切る。「古い本堂がありましたから、谷中の古い街並みを残す会の代表の方とも付き合ひがあり、すぐそばの上野の森にある東京芸術大学の建築の先生や学生さんもしばしば出入りしていました。

ですから、建て直すという話に対して、何とかこの明治時代の建物を上手く保存できないかという声がありました。確かに明治26年上棟の功德林寺最初の本堂ですから、貴重な建物でした」

新谷住職は保存する方向で設計を進めることにした。しかし、本堂保存設計案がいまひとつ腑に落ちない。そこで、2人目の設計士に依頼、だが、これもまとまらない。そこで、本堂保存は断腸の思いであきらめ、伽藍の一新に踏み切ることにした。

新築となると、新谷住職には大きな二つの基本概念があった。

ひとつは、谷中の街並みに合う建物にすること。これは近代的過



江戸時代の美人で有名だった笠森お仙で知られる笠森稲荷。功德林寺はこの稲荷のあった福泉院の境内地跡に建てられた。

ぎずに伝統を受け継ぎ、かつ繊細さを残すことを意味する。

もうひとつが、開かれた寺にすること。のちほど述べる功德林寺の成り立ちと関係するが、人の出入りしやすいお寺、ということだ。

この基本概念を具現化した新築伽藍の設計案を提示してくれたのが、新築案で3人目の設計士となった板垣元彬氏だった。成田山新勝寺本堂、吉田茂邸などを手掛けた日本の数寄屋造りの第一人者の吉田五十八氏に直接師事した板垣氏は、田無山總持寺宸殿、西宮市の北山山莊、旧岩波別邸の惜櫟莊などを手掛けた設計士だ。

「いいご縁を頂きました」

通算5人目となった板垣設計士と、本堂、客殿の外観、堂内、室内、中庭など各建物の細部まで詰める中で新谷住職はその人柄にも魅かれたというから、二人三脚で納得するものを完成させることができたのである。

取材で都合三度ほど功德林寺を訪れ、新伽藍での新谷住職お気に入りの箇所を伺っている。まずチタン仕様の本堂屋根のそりと客殿のむくり屋根、そして中央四間がフルオープンとなる本堂正面、さらに丸みを持たせた上に砂子（金銀箔の細かい粉）で仕上げた本尊光背奥の須称壇の壁、本堂左右の舞良戸と障子仕立て……と、初めて見るものも多かったが、説明を聞くとなると感心するものばかりだ。



本尊光背の奥部、須称壇の背にあたる壁が特別な仕様になっている。砂子仕上げで丸みをもたせてある。

こうしたこだわり抜いた新伽藍だけに、落慶式が待ち遠しかったに違いない。その落慶式を延ばす原因となった東日本大震災だが、この大震災は落慶式の延期ばかりか、新谷住職に大役を与える出来事にもなったのである。東日本大震災を受けて新設された浄土宗災害復興事務局の局長への就任である。

新谷住職は平成19年から浄土宗の宗会議員、国で言えば国会議員にあたるが、その議員として社会福祉推進事務局の局長に就いていた。しかし、東日本大震災にともなってその社会福祉推進事務局と新設災害復興事務局の局長のポストに就くことになったのである。そして災害復興事務局長としてお見舞い、調査、支援などでこの2年で被災地に20回以上足を運び、被災寺院からの信頼も篤いという。

その新谷住職は昭和35年8月、功德林寺の先代住職智勇上人の長男として生まれた。高校3年の時に祖父である先々代住職の寛應上人が遷化。大学に進むと70人余の部員を擁する体育会のスキー部の部長を務めた。そして、大学卒業とともに浄土宗の関係学校である板橋の大乗淑徳学園淑徳中高等学校で講師を務める。高校では社会を、専門学校では宗教を教える。同時に学習塾を立ち上げたのが、昭和57年のことだ。業界初となる少人数制授業を取り入れ、小学校の補修から始め、生徒の進級進学に合わせるうちに中学、高校、大学受験までフォローする面倒見の良い塾を作り上げた。最盛期には



谷中墓地側からの功德林寺入り口。
かつては墓地側を正面として本堂が
建てられていた。

15人の先生を雇用し、70人の生徒が在籍していたというから、事業家としても立派なものだ。

平成元年、28歳の時に父である先代住職が忽然と浄土に旅立ち、功德林寺住職に就任。功德林寺が所属する豊島組の浄土宗寺院に挨拶回りをし、寺の仕事に専念する方向へと舵をとる。自ら創業した学習塾を7年かけ、すべての生徒の面倒をみおえて、丁寧に閉塾した。平成9年には先代がつくった小石川の十咲幼稚園の跡地に御堂を建立。翌10年には先代時代から話があったものの紆余曲折していた寺の隣地を入手、新本堂はこの150坪の新境内地を利用し建っている。そして、平成15年には浄土宗の財団法人報恩明照会の事務局長に就任、平成21年淑徳の専門学校が廃校となり講師としての仕事から離れることになる。

この経歴をみると、率先垂範、リーダー型の行動力のあるタイプということがよくわかる。震災復興にはうってつけの人材だ。とはいえ、若くして副住職から住職になっているのに、なぜこんなにも色々な職に就いていたのかと訝しがる向きもあるだろう。それは功德林寺の歴史を遡ると解ってくる。

明治の仏教界を代表する浄土宗の僧侶、福田行誠師が、明治18年、東京府に「新寺創立願」の申請書を提出したのが功德林寺の嚆矢となる。師は浄土宗大本山増上寺法主(住職)だが、「新寺創立目論見」



写真は功德林寺の旧本堂で、創建当時の建物で、明治26年に上棟されている。

の永続資金拠出者欄には浄土宗総本山知恩院の鶴飼徹定門主(住職)、そして開山上人となる下谷静蓮寺富山聴岡上人、と浄土宗の東西総大本山の住職を含む僧侶三人の名が記されている。だが、拠出者欄の筆頭には旧佐土原候従三位島津忠寛氏、次いで従五位松平直徳氏と薩摩一門が記されている。ここで興味深いのは、筆頭に記された島津氏、松平氏はその後に功德林寺と特別な関係を結んでいないことである。加えて、創立願いの「殉難戦死者の霊を供養し、また谷中霊園に墓を持ちながら東京に菩提寺がない方の為に寺を建立したい」という主旨をみると、当時浄土宗寺院がなかった谷中の地に、何としても浄土宗寺院をという、東西総大本山の強い意向が浮かび上がってくる。実際、谷中霊園は江戸時代初期に法華から天台に宗旨変えた天王寺の墓域を東京府が買い取り、明治7年に公営墓地にしたもので、地方から出てきてこの谷中霊園に建墓した浄土宗の信者や念仏を唱える宗派の信者はお寺探しに困っていたに違いない。申請から8年後の明治26年に上棟式を行い、平成21年まで残った本堂は今の表通りに背を向け、正面を谷中霊園側に向けて建てられていた。ここにも創建の意図が伺える。つまり、功德林寺は創建から谷中に墓を持つ人のために建立された特別な寺院なのである。

とはいえ、谷中墓地の一部に狭いながらも功德林寺の墓地を持ち、徐々に壇信徒さんを増やしてきた。現在、350軒の壇信徒にお寺



左は新谷住職が兼務住職を務める尊念寺の宝珠地藏尊像。文京区の文化財に指定されている東都江戸六地藏の一つだ。右はかつての無量院跡に建てられているお堂。

を支えてもらっているが、江戸時代からの寺が林立する谷中で明治中期に設立された功德林寺は歴代住職が僧侶以外の職に就いていたのである。

「新伽藍は春秋彼岸に参拝される多くの檀信徒さんを意識しています。山門を入れて左手奥の本堂手前に広い前庭を設けたのは、90センチと高さを抑えた本堂正面の四間を全開すると、この前庭に100脚を超える椅子が並べられ、そのどこからでも本尊が拝めるからです」

両彼岸には参拝の有無に関わらず卒塔婆を全檀信徒分用意、平成23年からは「なむちゃん倶楽部」と称して、お経の勉強会、写経会、ファミリーコンサートなど新しい取り組みも始めた。

「やはり、お寺の境内に墓地がない分、工夫をしないとダメですね。幸い谷中は多くの人が集まる場所、そうした人たちにも集まっていただし、お念仏の音が響くお寺にしたいと……」

功德林寺ならではの「新伽藍を建立させ、さらなる展開を企画する一方、「震災から3年目となる今年からの支援こそ大切」という東日本大震災の復興支援のリーダーになった新谷住職、これからがまさに真価の見せどころだ。

(ルポライター)



いつも穏やかな表情の新谷住職。低音の声が印象的だ。



スペシャル対談

市川團十郎 若林隆壽

『黒谷』 上演に寄せて



歌舞伎の名作『一谷嫩軍記』「熊谷陣屋」

の後日譚とも言える『黒谷』は、團十郎丈が三升屋白治の筆名で自ら書き下ろし、主演した。平成二十一年、名古屋で初演、翌年、法然上人八百年大遠忌を記念して、京都の総本山知恩院奉納歌舞伎として再演され、平成二十四年、東京・国立能楽堂で三演目の上演となった。

「熊谷陣屋」は、源氏の勇将・熊谷次郎直実が、平敦盛の命を助けるために一子小次郎を手に掛け、無常を感じて出家する。

『黒谷』は、法然上人のもとで蓮生と名を改め修行する直実の前に、敦盛、その許嫁・玉織姫、そして、小次郎の霊が現れ、さまざまな想いを語る。

團十郎丈は重い御病氣と闘いながら脚本執筆に当たったというが、今回そのあたりのことを伺ってみることにした。

(若林記)

小次郎の救い

若林 三升屋白治という筆名は、白血病が治った、克服できた、というお心からです。

團十郎 はい、それと父（十一代目團十郎）の本名が治雄です、その一字をもらって。この筆名にしたときは、まだ治るかどうかわからなかったんですけどね。

若林 そうでしたか。それで『黒谷』ですが、知恩院で拝見したときより、今回の方がずっと完成度が高くなっていて、素晴らしかったと存じます。成田屋さんのお経、「日中礼讃」もぐっと上達なさっていて（笑）、蓮生の孤独な時間、静けさ、夜の闇が、身辺にヒタヒタと迫って参りました。

團十郎 ありがとうございます。今回、能舞台で演らせてもらうことによって、霊界との往来がより身近になった気がする、そう御覧いただけたのかもしれない。

前回は敦盛と小次郎を中村錦之助君、玉織姫を中村竜太郎君がつとめたので運びがスムーズにい

ったんですが、今度は娘の市川はたんが三役全部演じたいと言うものですから、衣裳替えの間をどうしようかと、かつては市川家の菩提寺だった常照院さんに相談に伺って、「日中礼讃」を教えていただいたわけなんです。

若林 野村恒道御住職ですか。

團十郎 はい、そうです。

若林 『黒谷』を拝見して、非常に感じ入ったのは、敦盛が熊谷に助けられたことを感謝していることなんです。実に独特な発想ですね。

「アラ恨めしいぞや熊谷」と言っています。

團十郎 「熊谷陣屋」では、藤の御方と、彌陀六（実は平宗清）に背負われた鎧櫃の中に身をひそめてる敦盛がその場を落ちのびるんですが、その後どうなったのかわからない。敦盛は小次郎という身代わりがあって、もう死んだことになっていますから、自分の戸籍がないのに生きている辛さというのとはどんなものなのか、と考えたわけなんです。

若林 御簾の内より知らぬ母と子が、世を渡る術のあるべきや……、というところですね。

團十郎 草を食^はんで泥水^{すず}吸^する畜生道なんですよ。

自分は後白河院の御胤ではあるけれども、育ての親である平経盛に殉じて討死を覚悟しての初陣だった。それを余計なことをしてくれた、となじるんですよ（笑）。

若林 普通、そこまですごい考えが及びませんよね。玉織姫も出てきて恨みを述べる。熊谷が、小次郎の首級^{しるし}を敦盛卿のだと言って、今際^{いまわ}のきわの姫に持たせるのが「組打」〔熊谷陣屋〕の前段、二段目〕の名場面ですのに、貞女^{ていじよ}二夫^{にふ}に交^まえずと契^{ちが}り違^{ちが}えて長空^{ながそ}をさ迷^{まよ}う身となった、と責めるんですよ。

團十郎 不憫^{ふびん}と思って、せめて未来の銭^{はな}と思^{おも}ったことが仇^{あだ}になった、と悩むことになる。蓮生は立つ瀬がありませんよね。しかし唯一の救いは粹小次郎なんです。

若林 父上、嘆き給うなよ、の件^{くだ}りです。

團十郎 ええ、敦盛卿のお身代わりに何の此身を厭^{いと}おうか。それよりも須磨の浜辺で互いに打物を抜きかざして、チョウと打てばオオと応えるその

嬉しき、その楽しき、と言ってくれて、救われるんですよ。

若林 あの場面は死を前にした父と子が、キャッチボールに一瞬興じるような詩情が漂って涙ができました。これでようやく蓮生も救われるとほっとしました。小次郎だけが極楽に往生するという、成田屋さんのお考えもよくわかりましたし。

團十郎 松竹のほうから、いずれ新しい歌舞伎座で、という話もチラリとありましたし、そうなれば私も嬉しいですよ。

闘病の体験

若林 成田屋さんの何度かにわたる御闘病中に、何か人智の及ばないような体験をなさったんでしょうか。そうでないとなかなかこうしたユニークな発想は生まれなような気が致しますが。

團十郎 人間は死とすれすれになったとき、ドーパミンとか、覚醒物質が出て肉体を援助するのかな、と思います。私はすれすれまでは行ってませんが、でもそういう中でいろんなものを見る

のかな、と思う。

病院にずっと一人でいると、金縛りかなしばりみたいな状態になることがあって、別の部屋から家族の方の泣き声が聞こえてくるので、ああ、今亡くなった方があるんだな、とわかります。すると、私のほうに、一緒に行ってくれ、俺だけじゃいやだから、という感じが来たりする。ギョッとつかまれる感じというより、何かもつとりアルな感じでそう思います。それが実際なのか夢なのかわかりませんが、私はそういう体験をしました。

若林 金縛りの中で、どうお答えになるんですか。
團十郎 今、私は行けないから、どうぞあなたお一人で行ってください、って言いましたね（笑）。頭の中で。

若林 闘病のご様子を伝えるテレビのドキュメンタリーを拝見しましたが、今のお話と符号して、そういう生きる意志をきちんと持っていていらしたんだらうな、と思いますね。

團十郎 生死に頓着はしませんけれども、この世に生かされている時間の大事さ。せっかくだ

いた命はきちんと全うしたいという気持はありますね。彼岸に行ったらわれわれの感覚でない時間が待っているかも知れないけど、今はわからない。しかし仏教が説いてきたそういうことが、物理的にかなり解明にされてきていますよね。これが面白いと思います。

『般若心経はんにやしんぎょう』に、色と空しよくとくうというのが入っていましたね。物質は無になるし、無は有になることをお釈迦様はわかっていらした。現在の物理の中でやつと無から有を生じる可能性があるということがわかりかけているんです。暗黒物質……。物ではない暗黒エネルギーというものがあるということがわかりかけているんですね。そういう感覚を二千年も前から持ってた方がいて、それを弟子たちが記録し、経文として残っているということもすごいことだと思いますね。

若林 法然上人とか、恵心僧都源信の著作を読むと、論理が非常に数学的ですよね。この窓とこの窓をあけるとこうなる、さらにこれとこれをあけるとこうなる、という発想でかかれていますので、

大変わかりやすいです。

ところで、闘病生活の映像を拝見していて、ここまでポジティブに立ち向かわれるのか、ここまで私生活を公表されるのか、という思いがありました。

團十郎 そうですね。娘が撮っていたものですかね。考えたんですけど、たとえば叡山えいざんの千日回峰行でも最後に闘あか伽水をとるところでは、もう人の手を借りないと自力ではできない。信者さんたちが抱きかかえてくださるようにして一歩一歩進んでいく。また、私がずっと以前に海老蔵を襲名したとき、鎌倉の建長寺さんで修行の真似ごとをしましたけれど、それをメディアに出していいかどうかご老師様に伺ったら、あなた一人でやっていると思うから迷いがあるんで、たとえ真似ごとにしても自分一人では何もできない、という意味で公表するならいいのではないか、とおっしゃっていただきました。

若林 それで闘病のお姿をお出しになったんですね。あれでずいぶん勇気づけられた方も多かった

と思います。

根のあるところに水をまく

若林 成田屋さんはときどき、地方の子供歌舞伎のご指導に当たられていらつしやるそうですね。

團十郎 はい。休みのときに石川県の小松に行く、ボランテニアですね。平等に満遍なく回るより、根のあるところに水をまくことが一番効果的なことです。小松の中学には役者（演技部）が二十人、山台やまだい（音楽部）が二十人ほどずついます。この指導を二十年近くやっていますから、千人以上の子供が歌舞伎を経験していることになりました。まさに継続は力なりだな、と思っています。

若林 種をまくのが因であり、そこに水をまくのが縁ですからね。

團十郎 縁なき衆生は度しがたし、と言いますし（笑）。ところで若林さんは何か後進の指導をなさっていますか。

若林 はい、御本山で修行僧に法話のし方を指導したりすることがありますが、以前の学僧は、お

前は見込みがないから山を下りなさい、というのと、後生ですからもう少し置いてください、と言つて身を入れるようになるんですけど、近ごろは、はい、わかりました、つてすぐ下ります。でも、そう言われて下りるんですから先生が責任持つてください、とも言われます（笑）。

團十郎 それが当世なんですかね。そう言えば十何年も前ですが、浅草歌舞伎で悴（海老蔵）が初めて『勧進帳』の弁慶をつとめた初日の前の晩。正月、元旦ですよ。あまりの重圧に耐えられなかったんだらうとは思いますが、私が年始回りから帰ってきたら、弟子たちと喧嘩しました。それで私が悴に、出てけ、つて言ったらほんとにすぐ出てっちゃつて、このときはちよつと慌てましたね（笑）。でもちゃんと帰つてきて、無事初日はあきましたけど。われわれのころは出てけ、つて言われても夜中にいる場所がなかったから、出て行きませんでしたけど、今は深夜でも居場所に困りませんからね。

若林 役者さんの受けるプレッシャーというもの

はわれわれの測り知れない大きなものなんですよと思います。

團十郎 役者が無理することはある程度しようがないと思いますね。役者はやりたいときにやりたいことをやる、というのが本来なんだと思いますからね。

若林 今日は、深いお話を本当にありがとうございます。でも、大切なお身体ですから、あまり御無理をなさいませんかように。

團十郎 はい、ありがとうございます。

十二代目市川團十郎（じゅうにだいめ いちかわ だんじゅうろう）
昭和21年東京生まれ。歌舞伎俳優。屋号は成田屋。スケールの大きな重厚な芸風で、現代の歌舞伎界を牽引する中心的存在。

若林隆壽（わかばやし りゅうじゆ）

昭和31年東京生まれ。浄土宗僧侶。浅草西光院、東京大仏・乗蓮寺住職。現在、浄土宗常任布教師、浄土宗東京教区布教師会副会

連載

会いたい人 関 容子

追悼特別編

感謝 勘三郎 さんに



関容子さんの「花の脇役」出版を祝う会でのお二人。(平成8年)

「浄土」連載のインタビュー「会いたい人」はおかげさまで『舞台の神に愛される男たち』として講談社から出版されたが、巻末の登場人物索引を見てみると、中村勘三郎さんの項が断然多い。それもそのはずで、勘三郎さんの親しい友人をゲストとして紹介していただいたり、予備知識としてエピソードを話してもらったりしているからだ。去年の暮れ、五十七歳という若さで急逝。あまりのことに、途方にくれている。

生前を偲ぶよすがとして、索引に従って面影を追ってみた。

すまけいさんは、学生アルバイトとして東宝でエキストラをしていた時分、『国定忠治』（稲垣浩監督）で、三船敏郎が忠治親分、夏木陽介が板割の浅太郎で、その背中におぶわれて出たのが当時の勘九郎坊やだった。

「生まれながらのスターで、まだ赤ん坊みたいなもののなに周りにからチャホヤされてそばへも寄れなかった」

とすまさんが感心していた。

勘三郎さんの葬儀に感動的な弔辞を述べた盟友坂東三津五郎さん。二人はほぼ同い年で、子供のころからよき競争相手だった。

「彼がコーラ飲んで僕がお茶飲んだと、ジジむさいってからかうんだけど、芝居に関しては彼のほうが大人びた考え方をしました。子役ばかりで『白浪五人男』の『勢揃い』をやったとき、彼は南郷力丸りきまるがいい、って。理由は、鬘かみむすが丸羽二重りふたふたで月代さかやきが青い、大人っぽく見えるから、って。すごいマニアックじゃないですか。おかげで僕が弁天小僧でしたけど」

その南郷を当時工業高校の生徒だった柄本明さんが観て、いたく感心したそうだ。

「口跡くちせきがよくてピチピチしてて生命力に溢れて、芝居が好きな人だということが全身にみなぎってる。圧倒的なうまさでしたね」

柄本さんはのちに演劇の道に入り、まさかあのチビ子スターと共演することになるうとは夢にも考えなかったという。

「新橋演舞場の『浅草バラダイス』で、勘三郎さ

んと藤山直美さんと並んで座ったりすると、片や先代中村屋の息子、一方は藤山寛美さんの娘でしょ。なんで俺がここにいるんだろう、って気がして、とてもついて行けなかった。直美さんは、この人何ができるの？　みたいな感じでね（笑）。怖かったです」

この話をするとき勘三郎さんに伝えると、笑って次のような話をした。

「柄本さんが直美に訊いてるの。あの、お父様はおいくつで亡くなられたんですか？　六十一です。ああ、ずいぶん早く亡くなられたんですね、って。それで二十五日間、昼夜昼夜休みなしの公演が終るころになったら、また柄本さんが訊いてるの。あの、お父様はこういう生活をどのくらい続けられていたんですか？　って。どのくらいって、何十年もですよ。ああ、ずいぶん長生きなさいましたね、って（笑）」

勘三郎さんからこの話を聞いたとき、笑いごとではない、と思つて私は背筋が寒くなった。それが現実に藤山寛美のほうで勘三郎さんより長生き

したことになったのだから……。

あまりに心優しい人は長く生きられない、という言い伝えがあるとかで、昔、姉上の波乃久里子さんと私とで真剣に心配したことがある。勘三郎さんの心優しさは半端ではなかった。

平成八年のこと。「お弟子」と呼ばれる身分の役者さん十人にインタビューした私の『花の脇役』を新潮社から出版したときのこと。

出版パーティーというより、十人の脇役さんにお礼を言う会を開きたいんだけど。いつも旦那のお家のパーティーだと受付とかばっかりしているお弟子さんたちを主役にして、と私が言いかけるのを勘三郎さんは遮って、

「わかった、僕が受付をしましょう」

とキツパリ言つて、本当に長時間にわたつて会の受付をしてくれた。このことは、当時京大阪の劇場にまで知れ渡り、かなり話題になったようで、私は大いに面目を施した。

勘三郎さんは「千両役者も一人では芝居ができない」ということを深く心に銘じていて、いつも

自ら買って出て祝う会の受付を手伝ってくれた勘三郎さん(右端)。



周りの人たちに感謝の念を忘れなかった。

お弟子さんたちにはもちろん、衣裳、床山、大道具、小道具、それに遠いところからスポットを当ててくれる照明さんにも、劇場の案内係や楽屋番にもお礼を言うのが常だった。

だから幕の内外、誰からもあんなに愛された役者はいなかった。

平成十七年、勘三郎を襲名したが、勘九郎として最後の舞台をつとめ終えた千秋楽。劇場の表方裏方が大勢集って列を作り、劇場を出る勘三郎さんを歓声で見送った。私はあとにも先にもそんなことをしてもらったという役者をほかに知らない。

本葬の日は、寒風の中を一般の焼香者が長時間長蛇の列を作って築地本願寺を取り囲み、その人数は一万二千人と発表された。

私は、お香典に「霊」とか「仏」とかの字を使いたくなくて、「感謝」と書いた。

勘三郎さん、本当に優しさを有難う。

みんな勘三郎さんが大好きでした。

此くの如く往生浄土の祖師の五影像を図繪したもうも、あまたの意あり。先ず恩徳を報ぜんがため、次に賢を見ては齊等ひとしからん事を思う故なり。

（法然上人『逆修説法』五七日）

このように、これまで中国において浄土往生の教えを説き伝えられてきた五人の祖師を描いた絵像を掲げたのには、多くの意味がありますが、ここでは二点をお伝えしましょう。まず祖師方の尊き恩徳に報いるためです。次に賢者を仰ぎ拝することによって、私たちも同じようになりたいと願い、そのように努める心を起すためです。

襷の重み——伝灯を受け継ぐ使命——

今年も、お正月の風物詩・箱根駅伝が開催されました。回を重ねて、第八九回になるそうです。各大学から選ばれた十人の精鋭達が、それぞれの大学名を刺繍した襷たすきをつないで、東京大手町から箱根芦ノ湖までの全一〇区、往復二一六キロを疾走します。旧東海道沿いに建立された自坊の裏手に第一京浜（国道一五号線）が伸びており、駅伝の二区と九区にあたっています。七年前の区間変更により、駅伝の最長区間こそ、箱根の山上りにあたる五区に譲りましたが、往路は今も「花の二区」と呼ばれ、各チームのエースがひしめく区間として有名で、九区も復路の最長区間です。私もほぼ毎年、一月二日と三日は、沿道まで応援に駆けつけ、旗を振りながら、選手達に精一杯のエールを送っています。子供の頃、選手の後を追おうと試みましたが、テレビで見ているのと違い、目の前をアツという間に通り過ぎていくそのスピードに驚かされたものです。

そんな私にとって、もっとも印象深いのは、小学生から中学生時代、昭和五一年から四年連続で「花の二区」を任された瀬古利彦選手の勇姿です。子供心に「あんなふうに早く走ってみたい」と憧れたものです。結局、立派な記録こそ残せませんでした。高校時代、陸上部に入った私が、中長距離を走るようになったのも、懐かしい思い出がそうさせたのかも知れません。私自身の話は

さておき、箱根駅伝は、わが国の長距離選手の憧れにもなっており、昨年開催されたロンドンオリンピックの男子マラソン選手である、藤原新選手と中本健太郎選手は拓殖大学で、山本亮選手は中央大学で、それぞれ箱根を走っている。すし、埼玉県職員として働きながら全国各地のマラソン大会で好成績を収めている市民ランナー・川内優輝選手も学習院大学時代に関東学連選抜の選手として箱根に出場しています。実に多くの陸上選手が、未来の箱根路を走ろうとの思いを胸に、今も努力を積み重ねていることでしょう。

そして、箱根駅伝でもっとも盛り上がるのが、襷のリレーです。毎年、襷をなんとかつなぐことができた瞬間、あるいは、惜しくもつなぐことができなかった瞬間が、それぞれの選手やチームの仲間はもちろん、学友や同窓生の喜びや悔しさの涙として表れます。襷リレーは、箱根を走る選手から選手への襷のリレーに留まらず、代表に選ばれた選手と陸上部の仲間全員との絆を結ぶリレーでもあり、あるいは、陸上部の伝統を築き上げてきた先輩から後輩に託された魂のリレーでもあり、さらには、各大学に連なるすべての人々の思いを担う心のリレーでもあるのです。そして、だからこそ、襷リレーをめぐるドラマが多くの人々の感動を呼び、箱根駅伝が日本人の心を揺さぶり続けてきたのでし

よう。

冒頭のご法語のように法然上人は、浄土宗を開宗されるにあたり、中国において、お念仏の教えを守り伝えられた善導大師等の五人を「中国浄土五祖」として選定され、法会にあたってそのお姿を絵像として掲げ、そのご生涯をお説きになりました。その理由こそ「祖師方が遺して下さった恩徳に報いるため」と「賢者を仰ぎ拝することによって、私たちも同じようにありたいと願い、そのように努める心を起こすため」という二点です。なるほど、中国浄土教の大成者である善導大師や浄土宗を開宗し選択本願念仏の教えを体系化された法然上人をはじめとする祖師方のご生涯を学び、その御姿を拝した時、私たちは、その量り知れないご恩に感謝の誠を捧げると共に、そのように尊い生涯を送れることなど到底不可能であることを自省しつつも、そんなお姿に一步でも二歩でも近づきたいと希い、精一杯努めさせていただこうとの思いを強くすることでしょう。そして、多くの祖師方や先人達がそのご生涯を捧げて、私達に伝え遺して下さったお念仏という尊い襷を、今度は私達が後に続く方々に一人でも多く伝え遺していくべき使命を背負っていることに改めて気付かされるのです。お念仏という伝灯を受け継いだ者の使命として…。

合掌

(林田康順)

第四十九回

江戸を歩く



伝通院から
白山へ

森 清鑑
大江戸ウォーカ―

伝通院から白山へ

祥雲寺門前町から南に下る道を行くと、右手に伝通院の裏門（東門）が見える。この柵門を抜け、緩やかな段々を上ると中央の本堂境内に通じる道に出る。右側には子院が左には学寮が建ち並んでいる。南の総門（表門）

伝通院から白山へ
散歩図



◆散歩図 伝通院から白山へ

から入ると広い参道の左右には区画整理された形で学寮が並び、しばらく歩くと、裏門からの道にぶつかり、そこに中門があり、潜ると広い本堂前の境内に出る。表門（総門）の前の大通りを真っ直ぐ南に行けば、安藤坂（右手に安藤飛騨守上屋敷）を下り、神田上水に出る。上水はここからすぐに広大な水戸中納言上屋敷の回遊式池泉庭園（後楽園）を突っ切り神田川水道橋の懸樋を通り神田市中に地下配水される。したがって総門前の東西の道はすぐに水戸中納言屋敷の北側をなめることになる。

伝通院の正式名は、無量山 傳通院 寿経寺。浄土宗第七祖の西蓮社了譽聖阿上人が小石川極楽水に開創した寿経寺を基とする。慶長七年家康の母、於大の方が亡くなると寿経寺を南に移し、広大な寺域を確保、彼女の法名から伝通院とした。なにしろ当初から幕府寺領六百石を与えられ、寺域は十萬坪に及び、子院や学寮が目白押しに並ぶ壮大な寺の建立

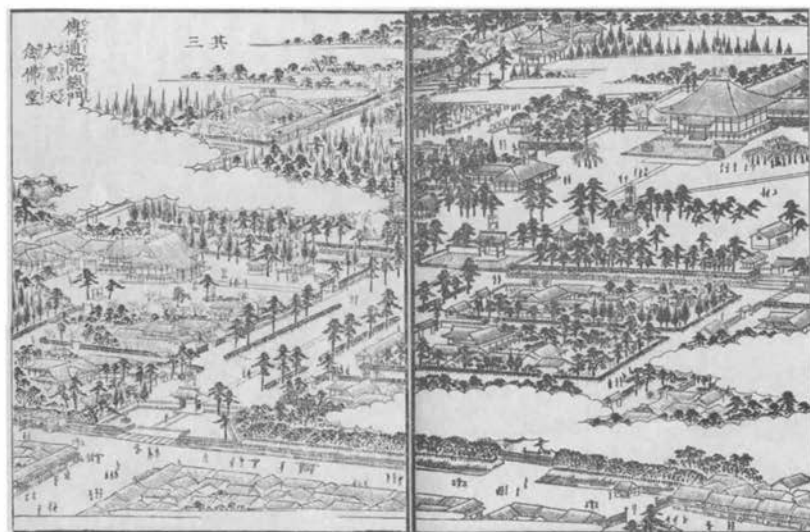
である。伝通院の特徴は僧侶の大学とでもいえる学寮の規模にある。学寮はいくつもの区画に分けられ、密集している。創建後、増上寺から学僧三百人が移され、多いときには千人もの学僧がここで修行していたという。したがって関東十八檀林の上席に指定され、増上寺、寛永寺と並ぶ將軍家江戸の三靈山と称されるに至る。於大の方のもとより、家康の側室お夏の方、そして数奇な運命を辿った秀忠の長女、千姫。みなここに葬られている。

再び来た道を北に戻り、御殿坂を登る。坂道の左は松平駿河守（愛媛）下屋敷の堀、右は松平備中守（千葉）中屋敷の堀。坂を登り切ると広小路に出る。左を見ると御家人の住宅が密集し、右は蓮華寺。この蓮華寺坂を登ると白山の五叉路。右に曲がるとすぐ左に円乗寺。当時も細い、参道を入ると八百屋お七の墓がある。お七は天和二年（一六八二）の「お七火事」の犯人とされ、品川鈴ヶ森で火刑。菩提寺の円乗寺に葬られた。墓は現在三

基。右側は歌舞伎役者岩井半四郎が寛政年間に建てたもの。

白山権現

五叉路に戻り北に直進すると白山坂。手前左に入ると左右が寺の門前町。突き当たりが白山権現社（白山神社）である。石段を登り切ると小高い山の上に境内があり、社の右奥に白山富士（富士信仰）、左奥に桜並木（花見）。神仏習合の白山権現の歴史は古い。奈良時代に加賀国白山に修験者が開き、その勧請を受けて江戸以前に武蔵国本郷に創建、二代將軍秀忠はこれを白山御殿（小石川植物園）の処に移し、綱吉の屋敷が作られることになったため当地に遷座、小石川の鎮守となった。祭神は菊理姫命など。菊理姫命は観音菩薩で神仏習合。これに山岳信仰と修験道が融合している。今日、この辺りの「白山」の地名は、白山権現社に由来している。江戸期、境内からは周囲が一望でき、さらに富士塚に登れば



◆江戸名所図会 伝通院総門 潜って左右に広大な学寮

その眺望はいつそう開けた。江戸っ子がこぞって花見を楽しんだところでもある。

境内から再び石段を下りて門前町の家宅を眺め、中門を潜り、鳥居を出る。左の白山坂を登ると、中山道にぶつかる（旧白山通り）。通行が激しいところなので、高札が立てられている。人々はそれを見て幕府通達などを知るのである。中山道を南に曲がると左側は大円寺。幕末、西洋式砲術をひろめた高島秋帆の墓がある。ちよつと北に行き、右に曲がると日光御成道（本郷通り）に出る。これを北に歩むとすぐ右側に門前町を割つてはいる細い参道が見える。これが高林寺である。寺域は現在よりも遙かに広い。ここには尾形洪庵が眠っている。

緒方洪庵

尾形洪庵は天然痘治療に貢献した日本近代医学の祖。足守藩（岡山）、下級藩士の子に生まれ（足守川近郊の田畑と丘の端境に生家



◆江戸名所図会 小石川白山権現社 右上門前町

記念碑)、大阪に出て医学を学び、江戸は坪井信道に学び。ここで万能科学者川本幸民に接する。その後、長崎でさらに医学を研鑽し、大阪に戻って北浜に蘭学塾「適塾」(建物は大阪大学が管理)を開き、多くの人物を育てた。洪庵の偉さは何といってもその教育者の顔である。主な門下生だけでも大島圭介、大村益次郎、手塚良山(手塚治虫の曾祖父)、橋本左内そして福沢諭吉。福沢はここで寝る間も惜しんで学ぶ。ひとつしかないオランダ語の辞書を奪うようにして夜、寝るまもなく

学んだと述懐している。福沢にとって本当の師は緒方洪庵であり、受け継いだ思想が慶応義塾に活かされている。洪庵先生は幕府の度重なる要請により、將軍家茂の奥医師、西洋医学所頭取として江戸に出る。そして過労がたたたり、翌年江戸に没する。墓は大きな自然岩。隣に妻八重の墓。この人は本当の賢夫人で塾生の面倒を見、福沢は「私のお母っかさんのような人で非常に偉いお方であった」と述べている。八重の葬儀にも門下生初め名士、一般人約二千名が参列したという。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十九回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

哲人伯爵と日本初演オペラ



★前号までのあらすじ

廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担ってドイツへ留学して四年、渡辺海旭はスイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表する大役を与えられ、その懇親会でハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と出会う。

ハインリッヒは、海旭が留学する前にハンガリー・オーストリア帝国の代理公使として、四年間日本に滞在、井上円了など仏教界の碩学とも交わる哲人として知られ、息子のリヒャルトは後に「汎ヨーロッパ主義」を唱えて「EUの父」となる。

海旭は知的交流を大いに期待したが、いきなり「金色夜叉」のあらすじを尋ねられて呆氣にとられる。しかし、哲人伯爵が滞日中に見初めて妻としたミツコが「金色夜叉」の舞台となった高級料亭で女中として働いており、一方海旭は海旭で仏門へ入るのにこの愛憎通俗小説が関わっていたことが判明するに及んで、二人は奇縁で結ばれていることを想うのだった。

本邦初オペラは
在日外国人による「ファウスト」

哲人伯爵、ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギーと東洋の若き留学僧、渡辺海旭は、会話をとぎらせると、ゆくりなくも、それぞれの人生の転換について想いをいたした。伯爵は、愛妻ミツコと出会って華麗なる外交の世界からボヘミアの古城での仏教研究三昧へ。かたや海旭は海旭で華麗なる出版業から学僧修業へ。年こそ違え、なんともよく似かよった人生の転轍のありようではないか。それだけではない、二人の人生の転轍には、ある場所、すなわち芝増上寺裏の高級料亭が関係していたのである。これまたなんたる近似。

海旭は、ここまでのやりとりで判明したお互いの深い縁をつくづく想って長嘆息をついた。よし、これで恩師ロイマン教授と畏友姉崎正治からも薦められた、もっともつと思索的な交流ができる。海旭はそう期待と確信を

深めて顔を哲人伯爵へと向け、まずはショーパーンハウエルと仏教について持論を質してみようと問いをまとめようとしたところ、哲人伯爵に先を越された。

「ところで、ワタナベ君——」

その後につづけられた言葉は、出会い頭にいきなり切り出された「コーヨークワンは健在かね」と同じく、海旭の予想を大きく裏切るものだった。哲人伯爵の口をついて出たのは、

「上野の山のオーデトリウムは健在かね」

海旭は不意をつかれて、「はあ？」とだけ答えて二の句を告げることができなかった。

「上野の山のオーデトリウム」とは、おそらく明治二十三年（一八九〇）に建てられた東京音楽学校（東京藝術大学音楽学部の前身）の奏楽堂（現在修復されて国の重要文化財）のことだと察しがついた。察しはついたが、なぜ奏楽堂なのだろう。哲人伯爵の意図がつかめないまま、海旭は返した。

「出来たてですから健在のはずです。少なくとも私が日本を出るときまでは。その後も火事などの災厄にあったとは聞いていません。その音校の奏楽堂がどうかしたのですか」

哲人伯爵は海旭の疑念には答えずに、新たな質問を發した。

「ところで、アネザキから聞いたが、貴兄は大のオペラ狂とか」

アネザキとは姉崎正治。海旭の一歳年下の畏友で東京帝国大学哲学科教授、哲人伯爵と是在日中に知己を得て親交がつづいている。海旭はますます混乱した。のっけではいきなり高級和風料亭「紅葉館」に重ねて「黄金の鬼女」の謎かけ。今度は、上野の山の奏楽堂にオペラ狂ときた。これではまさに禅問答だ。海旭はかぶりを振ると、ままよと、流れにまかせることにした。「いえいえ、貴国へ留学して開眼した俄かオペラ狂です」

実際、ストラスブルク大学に留学して、同宿の医学留学生・足立文太郎に手ほどきを受

けるうちに感化されたのだった。

「そうか」哲人伯爵は当てが外れて少々気落ちしたらしく一息いれた。「貴兄とはコーヨークワンで縁がつながるほどなので、ひよっとすると私のメフィストフェレスを観ていたかもしれないと思ったのだが……」

メフィストフェレス？ ゲーテの「ファウスト」の悪魔のことだろうか。オペラということからはグノーがゲーテ畢竟の大作に材をとった作品かもしれないが、それがなんだというのだ。さっぱり事情が飲み込めずお手上げ状態の海旭に、哲人伯爵が助け舟を出した。

「実は、私が音頭をとって、日本ではじめての本格オペラを企画し、自らも演じたのだ」

「それはいつのことですか」海旭は目を輝かせて訊き返した。

「翌年家族全員で日本を離れたのだから、ちょうど十年前の十一月だ」

ということとは明治二十七年（一八九四）。海旭は浄土宗学本校全科の卒業を翌年に控え、

勉学に打ち込んでいた時だった。余暇や趣味にかまける暇などなかった。伯爵による本邦初のオペラ上演は、ちょっとした社会的事件だったはずで、当時新聞などでも報じられたかもしれないが、海旭には初耳だった。学究に忙殺されて聞き逃したのかもしれない。

海旭は俄かに興味を覚えて身を乗り出した。「その本邦初のオペラ上演について、お話しただけませんか」

そこからしばらく海旭は聞き役に回ることもなかった。哲人伯爵がとつおいつ語り出した話は、予想以上に興味深いものだった。

旅順陥落でオペラ中断、 君が代斉唱

若い頃からオペラ狂であった哲人伯爵には、オペラのない暮らしは考えられなかった。故郷のボヘミアにいるときは、プロの技を楽しむとともに、時には自らも歌う日々。日常的にオペラと共にあった。憧れて赴任した東

洋の神秘の国は、期待どおり仏教学者と知的交流を得て、さらには最愛の女性ミツコと出会えて大いに満足を覚えたが、唯一といつていい不満はオペラを楽しめないことだった。

西欧音楽を学びとろうと明治二十年（一九八七）に東京音楽学校が設立されるが、当初は音楽教師の育成が主たる目的で、声楽家や演奏家の育成は未だ途上。開学から三年後に、哲人伯爵が「健在かね」と尋ねたオーデイトリウム（奏楽堂）がようやく建てられたことがその証でもあった。したがって本場の欧米人たちの鑑賞に堪え得るオペラの上演は「いまだし」だった。

だったら自分たちで上演するしかない。自身も玄人はだしであった哲人伯爵は、オペラ愛好家の外交官や在留外国人たちを語らつて、その実現へむけて動き始めた。もちろん一在留外国人の個人的な趣味と願望だけでは、容易にかなうはずもない。それを可能にしたのは、折りしも日清戦争が進行中であり、本場

からやってきた外国人たちにオペラを演じさせて「売上げ」を日本赤十字社へ寄附させ、銃後の支援」とするという大義名分であった。それには哲人伯爵の外交官としての手腕が発揮されたことは想像にかなくなかった。

おかげで東京音楽学校奏楽堂という一級の演奏場所が提供され、哲人伯爵は同好の士と日夜練習を重ねて、明治二十七年十一月二十四日、本邦初のオペラ上演の当日を迎えたのである。

演目はグノーの「ファウスト」第一幕「書斎の場」。主役のファウスト博士役は陸軍火薬庫お雇い技師であるイタリア人ブラチャネリ。哲人伯爵が演じたのはファウストを唆す悪魔メフィストフェレス。伴奏は宮内省式部職楽部、タクトを振るうは東京音楽学校お雇い教師のドイツ人音楽家エッケルトであった。

と、上演中に想定外の突発事件が起き、それがこの歴史的演奏をより思い出深いものにした。「演」たけなわの頃、乃木希典率いる

歩兵第一師団の夜陰に乗じた猛攻により清国北洋艦隊の根拠地である旅順が陥落したとの報せが入ったのだ。居合わせた式部官が楽劇を中断させ、聴衆たちに凱歌を報告するや、会場は総立ちとなり、機転をきかせたオーケストラの伴奏で「君が代」の大斉唱。指揮者のエッケルトが「君が代」の編曲者であったというのも、この社会的事件をより印象深くするのに一役買ったのだった。

ワグネリアンの楽劇合戦

哲人伯爵の説明がおわったところで、聞き役に徹していた海旭は待ちきれずに尋ねた。

「ところで、なぜ本邦初の演目を、『ファウスト』にしたのですか。もっと明るく楽しい演目がいくらでもあるではありませんか。ひょっとして『ファウスト』にある東洋的なものを意図されたからですか」

「いかにもその通りと答えたいところだが」哲人伯爵は一拍おいて海旭に微笑みかけた。

「残念ながら二つの点で答えは否だ。あのとき私たちが演じることができたのは、あの演目ぐらいしかなかったのだ。わが同好の士の中で独唱に堪えられるのは、イタリア人技師と私しかいなかった。そしてイタリア人はテノール、私はバスとなると、おのずから選曲はきまってくる」

「でも、他にも選択肢はあったのでは。あえて『ファウスト』を選んだのは……と食い下がったが、海旭の期待はあっさり裏切られた。「たしかにゲーテ翁の大作はインドの戯曲『シャクンタラー』の影響を受けており、東洋的なものを内包しておる。しかし、グノーの『ファウスト』は換骨奪胎著しい。いつてみれば、酒池肉林に溺れる身勝手な男の物語だ。したがってドイツ文化圏では、悲劇の女主人公の名をとって『マルガレーテ』と題名を変えて上演されるのがないだ。貴兄の哲学的期待を裏切って誠に申し訳ない」

(つづく)

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●楽器

〔特選〕ジングルベル聞きて素通り楽器店

増田信子

楽器店の前を通る。いつもははやつている曲で客を呼び込むのだが、やがて来るクリスマスのために、今はジングルベルである。街を行くと、あちこちから同じ曲が聞こえてくるのだろう。全て素通りである。

〔佳作〕打楽器のごと子が叩く初氷

佐藤雅子

枯野原踏めば楽器となりし靴

森 懐人

なだらかに秋風下る楽器街

鳥羽 梓

●食器

〔特選〕煤光り祖父手造りの食器棚

石原 新

どういう職業かは出ていないが、本職として造ったのではない。とにかく器用な人なのだ。長い間使い続けて、もう煤光りしてきた

のだが、まだまだ現役である。祖父の手になるものとして、大事にせねばなるまい。

〈佳作〉

秋闌くや食器に細き金の縁

長谷川裕

アルミ食器へらへら光る秋灯

齊田 仁

冬うららB級グルメの紙食器

井村善也

●自由題

〈特選〉

中華鍋ぎとぎと冬の港町

遠山 遥

中華料理というと、油でジューツと炒めると
いうのが、まず頭に浮かぶ。中華鍋の「ぎと
ぎと」は、その辺を満足させるに十分な表現
である。港町というから、横浜の中華街を思
い浮かべるが、どうだろう。

〈佳作〉

雪空の下はたと止む掘削機

進藤里佳子

ごまめ干す半島なべて小春風

浜口佳春

電車待つ女まぶかに冬帽子

山口信子



誌上句会 〈編集部選〉

■楽器

校ちかし吹奏楽器木枯しと
船底に楽器置かれて星月夜
長き夜を楽器のように人眠る
秋風や首から入れる管楽器
秋深し主のおらぬ楽器店
月光の楽器搬入口くぐる
秋茄子のようなカーブの楽器かな
天鵝絨に楽器くるまれ豊の秋
秋麗の運河に響く管楽器
打楽器のためのスペース凍曇り
音楽堂冴えて響きぬ管楽器

當麻あさ子
中村史郎
村田 篠
濱野具円
山内桃児
近 恵
笠井亜子
工藤 掉
山口東人
内藤隼人
浜口佳春

■食器

葉牡丹にガラスの食器よく似合う
春祝う食器由来の宝相華
銀食器磨けばたつぷりの月夜
晩秋の棚に光れる食器かな
箸置きも食器のひとつ夏料理
犬小屋に菊の模様の食器かな
寒の朝食器の尻の艶めけり
市庁舎の秋のランチの食器かな
マスカット置けば食器の白映える
銀食器綺麗コンソメスプ少し
十月の海が運びし洋食器

佐藤雅子
當麻あさ子
笠井亜子
村田 篠
浜口佳春
山口東人
中嶋いづる
中村史郎
鈴木真理子
小林苑を
鳥羽 梓

■自由題

きらきらと畝に白線今朝の霜
若くしてまた逝く友や寒念仏
山眠る如く病臥の夫眠る
余命なき猫と過ぐすや暮の秋
一斉に譜面をめくる秋の風
風見鶏みな海へ向く港町
また海の近くに住んで秋の雲
十六夜の猫の孤独を抱きあげる
コスモスや港に象が着くという
ジャズ喫茶兄は宵闇より暗し
秋の雲棧橋に人あつまれり
冬麗や駅舎に並ぶ鍵の穴

當麻あさ子
森 懐人
佐藤雅子
飯島英徳
井口吾郎
斉田 仁
村田 篠
濱野具円
鳥羽 梓
笠井亜子
山口東人
中嶋いづる

浄土誌上句会の お知らせ

兼題

分節 自由題

締切・二〇一三年二月二十日
発表・『浄土』二〇一三年五月号
選者・増田河郎子（『南風』主筆）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

98

かい目

さっちゃんね

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・



編集後記

冬緩む地面に水の浸みる朝

岱潤

昨年はミリオンセラー、百万部を超えてヒットする本はなかったそうです。阿川佐和子さんの『聞く力』が最も売れたそうですが、それにあやかっただけで、『〇〇の力』という本がやたらと目についたのが、昨年の暮れでした。出版界はヒットを出すのに躍起で、二番煎じ的な本が多い気がします。

その一つが『超訳』シリーズです。「ニーチェ」が大ヒットし、「ブッタ」、「論語」とそれなりに売れているようです。現代の人々は短い言葉に飢えているのかもしれない。不安でどうしようもない

とき、端的な言葉が欲しいのでしょう。

長い文章、論理的解説を読んでいる時間はないのです。そう言えば先日こんな標語を目にしました。「氷が溶けると水になるよりも、春になるの方がいい」。これはかなり昔ひろさちや先生が言っていたお話ですが、文言というのは、このように一人歩きしてゆくものかと考えさせられました。

ひろさちや先生といえは、昨年出された本『下りる』の中で、『あくせく・がつがつ・いらいら』ではなく、『のんびり・ゆつたり・ほどほど』がいい」ということを述べられていました。そしてその行動を表題の「下りる」という言葉ひとこ

とで表現されていました。五木寛之氏の『下山の思想』と合わせ、現代の日本を

生きてゆく、その生き方は、二人の識者が言うように、下りるという意識がキーワードだと考えるしかないようです。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻 一三月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年一月二十日
発行 平成二十五年二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティイ

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八七六九四七
FAX 〇三三三七八七六九四七
振替 〇二八〇八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

美味探訪

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



うぐいす餅



錦梅



越後屋若狭

墨田

「冬来たりなば春遠からじ」。厳寒の風雪に耐えて咲く梅の季節になりました。早春の花の先駆けで、季節の花の一番手の梅は花の兄ともいわれ、好文木、香雪、春告木等と多くの別名を持っています。

古人に曰く「梅あって雪なきは精神ならず」と教えるのは、禅語の梅花雪和香。

なるほど茶人が梅を好む所以だろうと思います。

今回は、この茶人たちが愛する和菓子の紹介です。

東京・両国千歳の住宅街に佇むお店『越後屋若狭』。創業は古く江戸時代。多くの文人に愛された老舗和菓子店です。

紹介するのは、8代目のご主人桑原氏の手による、薄い藤色の上品な甘さの漉し餡を柔らかな求肥で包んだ「うぐいす餅」。また、濃い紅と白を重ねた奥行のある美しい桃色の上用練りきりの「錦梅」は、口のなかではらはらと溶け、粒小豆の食感がアクセントになっている。こんな上等な季節ごとの和菓子が、東京でいただけることに感謝です。

高級のみを求めるのではなく、完成度の高さを追及している姿勢が、『越後屋若狭』の和菓子を受用する人が多い理由なのでしょう。



東京都墨田区千歳1-8-4

(JR総武線「両国」駅徒歩6分・都営新宿線「森下」駅500メートル)

☎03-3631-3605

完全予約制

営業時間 10:00~17:00

定休日 日曜・祝日

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方 其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方 こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方 こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



幸浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より